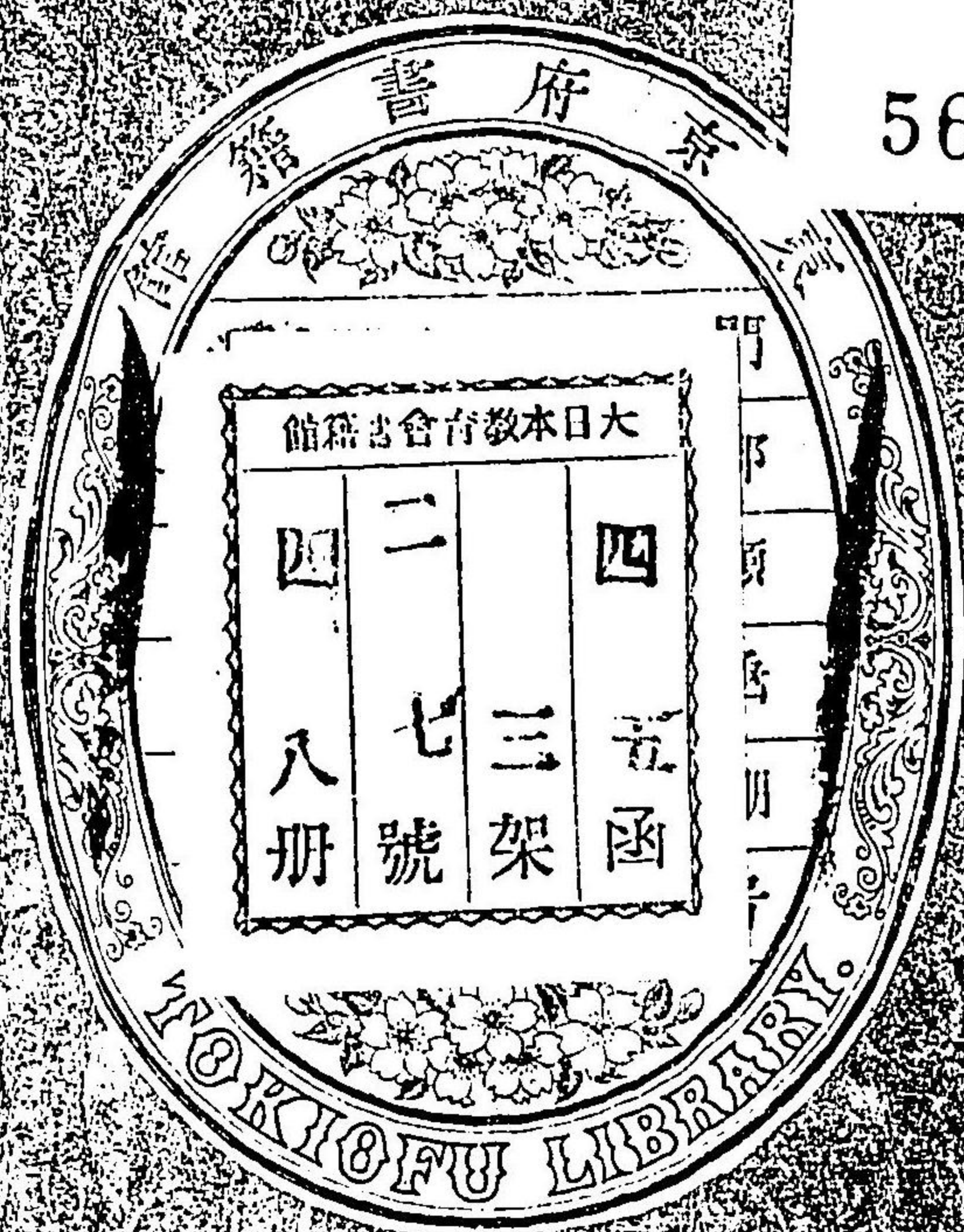


事  
村井靜馬編輯  
明  
治  
太平記  
廿二編  
上

特32

562





村井靜馬編輯  
鮮齋永濯畫



官許

事  
情  
明治太平記  
全

東京書肆 延壽堂藏版

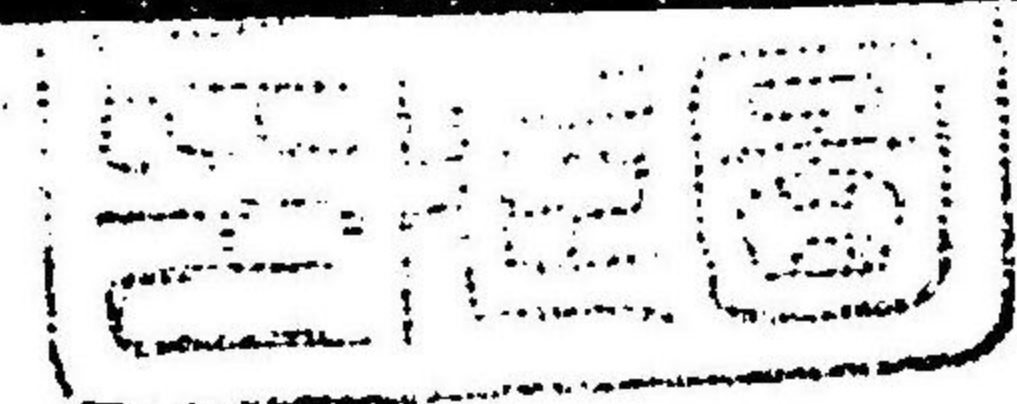


秋風

清

夕乃水

種山



秋風

大平記

種山

清

五三〇六四一

五三〇六四一

大平記  
種山  
秋風  
清



行軍高千  
穂山脈の  
澗水よ  
苦む



# 卷之弍

別働第三斥候と紫微山より  
 出まはし始まり鹿兒島の軍加  
 治木より連絡と通むるに終る

# 卷之弍

高千穂第一等の要所を  
 占むるに始まり運輸の費を  
 省くに終る

明治太平記 廿二編 卷之一

東京 村井静馬著

説下六月十九日別働第三斥候の一小隊と紫微  
 山より出まはし此時藪の中より人影ありこれに直ち  
 入りて之を捕へ賊情を糾し且つ先導させて前  
 の山より登る賊一小隊あり見えて銃を擲ちて潰  
 へ去らんとす我兵大に呼ぶるに曰く逃る者  
 撃んと賊皆降る此日本營と出水より移る水俣

三好少將の本営とある廿日出水郷の賊の隊長  
 伊藤四郎左衛門六小隊と率ゐて警視隊の軍門  
 に降る此日大口攻撃の第三旅團正面高隈山と  
 抜き別働第二旅團兵ハ左翼より進入して數壘  
 と抜き一齊に大口に進入を再び進で里萩山に  
 哨兵と置き軍を進む此戦ハ賊將淵辺軍平戦  
 死せりとつゝ二十一日川路少將阿久根と陷ま  
 賊と進撃するものと八里より川内川にわたる

賊橋と火き舟と向ふの岸に繋ぎ水涯に砲臺を  
 築き大小砲と連れ放ちて之を防ぐ我が兵渉る  
 ことを得ず相持して戦ふ別働第二の右翼兵ハ  
 一昨十九日於て賊の哨兵と小戦を賊兵も小  
 林方面に壘を築きて我が都城の通路を支へん  
 とは是に至つて亦飯野より来り襲ふ此地肥日の  
 諸山及び霧島山脈の谿の間より賊兵高き処  
 に據り砲撃すると以て市中忽ち火起る我兵釜

底<sup>そ</sup>は在<sup>あ</sup>るが如<sup>ごと</sup>く一<sup>い</sup>まりのみまらば賊<sup>ぞく</sup>地<sup>ち</sup>は斗<sup>と</sup>入<sup>い</sup>を  
る<sup>ら</sup>は以<sup>も</sup>て援<sup>えん</sup>兵<sup>へい</sup>を後<sup>ご</sup>ろと絶<sup>え</sup>るの恐<sup>おそ</sup>きはなり遂<sup>す</sup>  
に退<sup>あ</sup>きて舟<sup>ふね</sup>走<sup>やう</sup>村<sup>むら</sup>を保<sup>も</sup>つ豊<sup>とよ</sup>後<sup>ご</sup>口<sup>ぐち</sup>の軍<sup>ぐん</sup>重<sup>じゆう</sup>岡<sup>が</sup>と攻<sup>こう</sup>撃<sup>げき</sup>  
せんといふ昨夜<sup>さくや</sup>十二時<sup>じふにじ</sup>賊<sup>ぞく</sup>重<sup>じゆう</sup>岡<sup>が</sup>と退<sup>あ</sup>きて五<sup>ご</sup>ヶ瀬<sup>せ</sup>川<sup>がわ</sup>  
と舟<sup>ふね</sup>を日向<sup>ひむか</sup>の延<sup>のび</sup>岡<sup>が</sup>に下<sup>くだ</sup>る賊<sup>ぞく</sup>兵<sup>へい</sup>凡<sup>およ</sup>二<sup>に</sup>千<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>あり  
とり入<sup>い</sup>賊<sup>ぞく</sup>その志<sup>こころざし</sup>と豊<sup>とよ</sup>後<sup>ご</sup>に専<sup>せん</sup>らうよまることを得<sup>え</sup>ぞ  
是<sup>こゝ</sup>に至<sup>いた</sup>りて皆<sup>みな</sup>引<sup>ひ</sup>き去<sup>さ</sup>る後<sup>ご</sup>桐<sup>とう</sup>野<sup>の</sup>利<sup>り</sup>秋<sup>あき</sup>命<sup>のち</sup>トて重<sup>じゆう</sup>岡<sup>が</sup>  
退<sup>あ</sup>軍<sup>ぐん</sup>の賊<sup>ぞく</sup>將<sup>しょう</sup>に割<sup>わり</sup>腹<sup>はら</sup>せしむと我<sup>われ</sup>兵<sup>へい</sup>重<sup>じゆう</sup>岡<sup>が</sup>に入<sup>い</sup>り進<sup>すす</sup>

んで赤<sup>あか</sup>松<sup>まつ</sup>崎<sup>さき</sup>の國<sup>くに</sup>境<sup>さかい</sup>と固<sup>と</sup>守<sup>しゆ</sup>を豊<sup>とよ</sup>後<sup>ご</sup>の國<sup>くに</sup>全<sup>ぜん</sup>く平<sup>へい</sup>定<sup>てい</sup>  
して亦<sup>また</sup>残<sup>ざん</sup>賊<sup>ぞく</sup>の影<sup>かげ</sup>と遺<sup>い</sup>ささるるに二十<sup>にじゅう</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>別<sup>べつ</sup>働<sup>どう</sup>  
第三<sup>だいさん</sup>旅<sup>りよ</sup>團<sup>だん</sup>の別<sup>べつ</sup>軍<sup>ぐん</sup>宮<sup>みや</sup>の城<sup>しろ</sup>と取<sup>と</sup>る尋<sup>ひ</sup>で本<sup>ほん</sup>宮<sup>みや</sup>と置<sup>か</sup>  
鹿<sup>か</sup>兒<sup>ご</sup>島<sup>しま</sup>の軍<sup>ぐん</sup>謀<sup>まう</sup>る処<sup>ところ</sup>より別<sup>べつ</sup>働<sup>どう</sup>第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>旅<sup>りよ</sup>團<sup>だん</sup>の参<sup>さん</sup>謀<sup>まう</sup>長<sup>ちやう</sup>  
岡<sup>おか</sup>澤<sup>ざい</sup>中<sup>ちゆう</sup>佐<sup>さ</sup>黒<sup>くろ</sup>木<sup>き</sup>中<sup>ちゆう</sup>佐<sup>さ</sup>第<sup>だい</sup>四<sup>し</sup>旅<sup>りよ</sup>團<sup>だん</sup>の坂<sup>さか</sup>本<sup>ほん</sup>少<sup>せう</sup>佐<sup>さ</sup>と俱<sup>とも</sup>  
總<sup>そう</sup>軍<sup>ぐん</sup>二<sup>に</sup>千<sup>せん</sup>七<sup>しち</sup>百<sup>ひやく</sup>人<sup>にん</sup>と率<sup>りつ</sup>して昼<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>軍<sup>ぐん</sup>艦<sup>かん</sup>に乘<sup>のり</sup>ト天<sup>てん</sup>明<sup>めい</sup>  
重<sup>じゆう</sup>富<sup>ふ</sup>近<sup>きん</sup>傍<sup>ぼう</sup>に上<sup>じやう</sup>陸<sup>りく</sup>して迂<sup>う</sup>回<sup>かい</sup>して城<sup>しろ</sup>後<sup>ご</sup>の賊<sup>ぞく</sup>巢<sup>そう</sup>と衝<sup>つ</sup>ん  
と此<sup>こゝ</sup>賊<sup>ぞく</sup>の重<sup>じゆう</sup>富<sup>ふ</sup>に在<sup>あ</sup>るもの愕<sup>がく</sup>然<sup>ぜん</sup>として兵<sup>へい</sup>器<sup>き</sup>を執<sup>と</sup>

明治本評記 廿二編卷一



重岡の賊  
 五千人五ヶ  
 瀬川を舟  
 りて延岡  
 下る



四  
 下  
 延岡

て防守を官軍大よ至る賊遂よ支ふる能く  
 午前五時半重富と放火一大隊と停めて此地  
 備へしめ我兵三道より城下の背後よ向つと  
 進撃を賊兵所々よ支ふるといども且破り且  
 進きて白銀坂と上り吉野の原よ出づ時は春日  
 龍驤の兩艦へ加治木よ砲撃し重富の背後よ備  
 ふる軍も次第よ進きて沿道よ放火を時は城中  
 より礮山方面の背後よ火起り鬨の声砲の響

き乱夷まると以て衝背軍の既よ至ると知り大  
 沼少佐二中隊と率の結山よ向つと進撃を此時  
 軍艦へ絶えび大小砲と発して賊壘と打つ結山  
 攻守の賊へ有名の行進隊あり以て要地の堅  
 壁を固守して應戦を我が砲九屢々命中されど  
 も動らざる頗る雷萬春の徒多し故に激戦時と移  
 して未だ抜くと能く衝背軍の放火漸く逼り  
 既よ山の後咫尺の地よ火起る我兵大りの力と

得て関の声と発し躍りて賊壘に突て入る賊遂  
に支ふるあつと能くは壘を棄て走る結山及び近  
傍の山壘随つて陥る我兵放火し進み背後の  
兵と連絡を是に至りて数十日間俯して城中と  
射撃する所の二本松壘場亦我が有る歸を此日  
豊後の軍本営と重岡に置き熊田攻撃の部署と  
定む川上少佐の木浦柳瀬水ヶ谷梓峠等と固守  
して兼て三重市の後備とる大原川ヶ原陸地

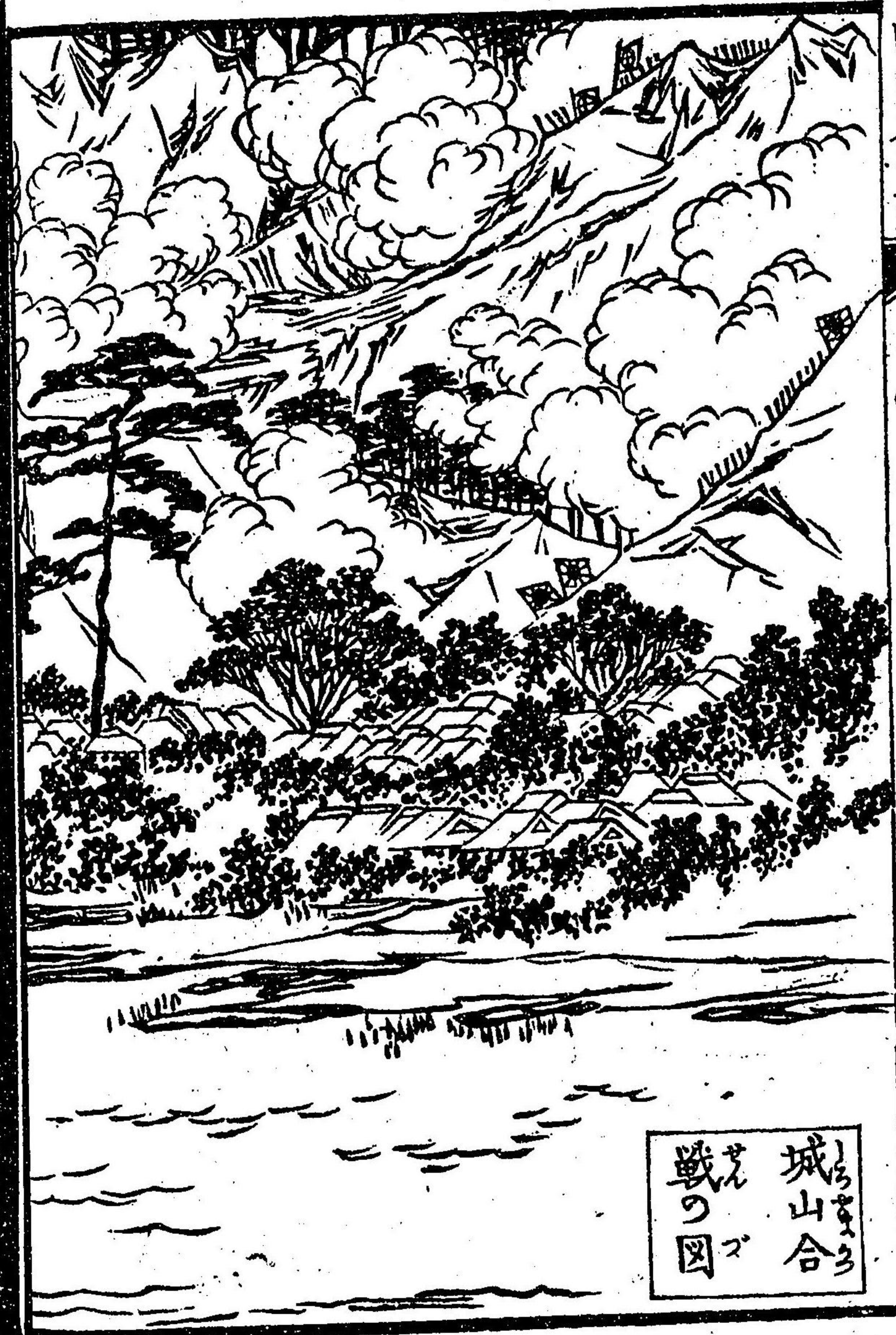
峠黒澤越へ奥少佐之と守りて兼て佐伯の警備  
とるを警視隊へ黒澤村に営と置き黒澤越石神  
峠奥峠場照越の哨兵と布く二十三日川内川の  
兵水と隔て相持に我が兵下流と涉り俄に進  
みて對岸の賊と横撃を賊壘と棄て走る大砲五  
門と獲る此日鹿兒島の賊前敗と耻ぢ二本松の  
壘場より来襲を其勢ひ必死と極め大砲と連発し  
て呐喊猪突疾風の如し既より磯山各所より

大小砲声大に起る我が兵遂に當ると能く退  
いと原の守線に入る昨日百死して獲る所今朝  
復と皆賊の有に歸り旧に依て俯して城中と射  
撃を二十四日別働第三旅團一大隊と分つる鹿  
兒島に入らむ途上船木久富木の中間に於て  
少の戦争あり進とて入来峠に至る此日鹿兒  
島の軍前日一勝一敗地と換ると以て遺憾尽き  
ば議して再び防禦線の左翼より出と膠田都湊

田氏の陣大明神が岡武山は大進撃せんと膠  
田の海岸より山脈皆西田橋高麗橋等の方面  
に蜿蜒を別働第一吉川少佐等二大隊と率る船  
み乗じて谿山村より上陸して迂回して賊背と衝く  
谿山の賊おと支つて戦ふ撃てこれと走ら  
我が兵二中隊と停めく背後に備へ人家に放火  
して前進む我軍又武山の正面武の橋より一大  
隊と出と此時両軍の大小砲の雷の轟くが如く



甲斐守上三郎 巻一



城山合戦の図

谷山の猛火を天を焦し賊が山腹の胸壁を據て  
乱射する銃弾の霰の走るが如し既に迂回  
兵の山上に見ゆは鬨の聲と揚るを聞き賊の正  
面攻撃兵を防ぐもの壘を捨て走る或は銃と棄  
て遁るものあり或は樹間に出没して狙撃せ  
らるるは是に於て正面兵の勢ひを得て決橋と  
奪ひ膠田より踰えて武山に至り迂回兵と連絡  
す此時高島少将自ら進みて山上に至り兵と部

署して都湊山と攻撃を賊既去りる踪あり偵  
者報トてりし賊は大明神ヶ岡田氏の陣の山壘  
を據ると是に於て警視隊の田氏の陣へ別働隊  
一旅團を大明神ヶ岡へ向ふ山上俱に堅壁あり  
大砲數門を備へたるを我が兵仰ひてあまを  
攻む上下の砲弾織るが如し我軍の一山に蟻集ま  
るもの山上別は兵士の山とあはれ似たり午後  
一時より六時に至りて勝敗あり時は雲雨俄に

起りて忽ち前山と遮る加ふるに武村は放火を  
る所の黒烟衝て上騰し大小の砲烟と合一暗澹  
として黒雲賊據の両山と蔽ひ一時は砲声を  
聞くのど其戦状の官賊俱に見るおと能く烈  
戦苦闘七時半に至る我が兵一関して賊壘を衝  
入る勢ひ乳虎の如し両山一時は陥る賊遂に山  
下は走る此日官賊俱に死傷極めて多し大尉以  
下士官十人戦死を同日延岡の賊霧の深きに乗

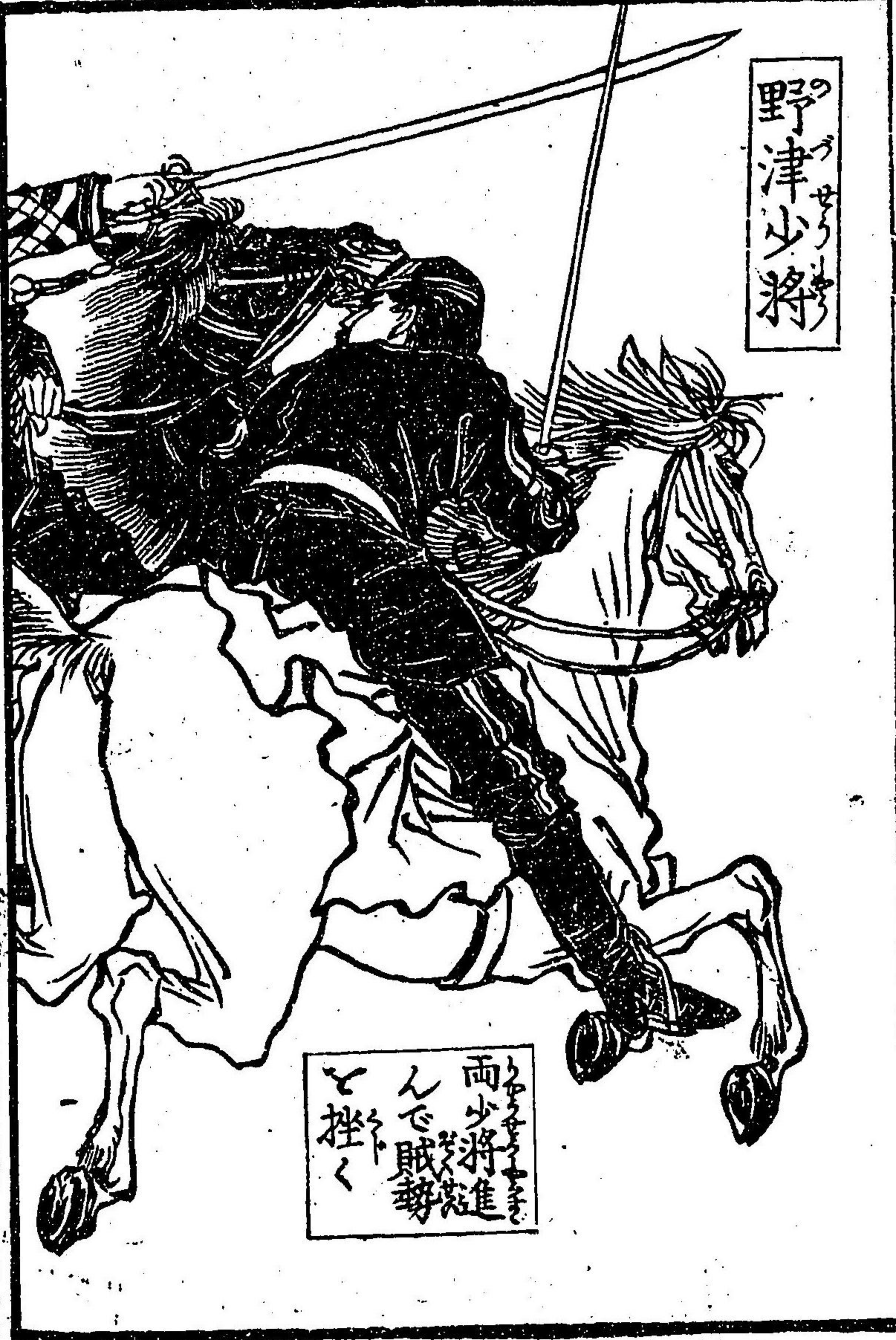
ト重岡口本道及び右翼の哨線に侵入を左翼は  
もも賊兵来り襲ふ我が兵三胸壁を棄て退く賊  
もも水ヶ谷並に水古尻の右翼へ来撃を我が兵  
避けし是に於て左右翼の連絡全く絶ゆ會々豫  
備兵二中隊の来るに依て進んで賊の側面を迂  
回し不意に驚し奪はるる所の胸壁を衝き左翼  
兵おとす應じて遂に旧線と復を同時佐伯口徒  
行路峠木浦等ももも賊来り襲ふ我が軍線路と

失ふに至らむ此時に當りて水浦柳ヶ瀬水ヶ谷  
 梓峠本街道水古尻の諸路へ川上少佐大原川ヶ  
 原蛙池峠黒澤の諸路へ奥少佐の攻守ある處是  
 に於て將校議して二十五日と以て第一旅團は  
 謀一俱に日向に進入せんとす二十五日別働隊  
 三旅團の一軍鹿兒島城の背後に達せ賊の迂回  
 て我々の背後を圍むなり苦戦してあまを卻け遂  
 に踴躍して城下に入る是に於て肥薩陸地の連

絡通を内外の歡ぶ声天に震ふ此日第二旅團兵  
 岡松村に進む吉田に至らんとす賊の川を隔て  
 出沒せしむと見る是より先第二旅團へ人吉攻撃  
 の後軍を還して八代に在り兵を分つて豊後  
 出ま是に於て三好少將進んで第三旅團別働隊  
 二旅團の間に出づ此時第一旅團へ馬見原に本  
 營を置き肥日境上を嚴備して未だ兵を進め  
 其戰鬥線に入らざる旅以て是に至りて豊



野津少將



少將進  
んて賊勢  
と挫く

三好少將



後の軍進んで豊日の國境に臨み逢ふ連絡して  
 て日向の賊と殲さんと此日兵と出してオクズ  
 及び宮水に進む此地三田井と距ると五里進路  
 高千穂山脈の萬山中に在り澗水溢ると溪路と  
 没し間々往来と絶つて以て行軍究めて意の如  
 くまゝに豊後口大原山に賊徒も来り襲ふ勝  
 地峠の左翼の深山より迂回し來りて我が背後  
 を突く大原の守兵苦戦健闘して遂に原の線と

棄て大原抗の内より山脈を渉りて赤水峠と固  
 守を二十六日川路少將自ら兵と率めて鹿兒島  
 に至る此日第四旅團第三大隊と以て鹿兒島を  
 發し吉野に向つて進む一軍ハ戸越より一軍  
 を桂山より一軍を丹田遠の本道よりを戸越  
 より進む者戸越山上の残賊と撃ち銃尖と擧簇  
 一突て壘と抜く一軍實方の前山に賊と撃ちく  
 去ると走らし杉木馬場に至る賊俄り兵と分

つゝ短兵衝いゝ来る既よして我が援兵来り撃  
 て賊と挫ぐ賊屈せむ午後二時川上より向つゝ走  
 る我兵諸隊と收め桂山より雀ヶ宮戸越を守る  
 二十七日鹿兒島の賊の圍と既よ開け賊城下と  
 去ると以之斥候隊と谿山伊集院市来へ出ゝ又  
 一大隊と肥後街道川内川へ出ゝ宮の城入来と  
 經る第三旅團の右翼よ連絡せんといふ豊後口の  
 軍兵と兩道よ分ち一は赤松口一は豆売峠口よ

り進んで徒行路峠の賊勢と殺ぐんと夜よ入  
 りて雨甚し赤松口よ一隊と新道よ一隊と古屋  
 よ出ゝ俱よ燈村よ進む豆売峠を松葉よ進む雨  
 道俱よ澗水漲り溢るよ通るよと能るよ工兵橋  
 と架して兵と渡る豆売口よ進んで猿焼峠よ至  
 り賊の哨兵と布くと見る是よ於て赤木峠と攻  
 撃を赤松口よ燈村よ入る賊を橋と徹して哨兵  
 と置く二十八日豊後口第一旅團の正面兵を日

の影川漲る以て進むと能く右翼ハヲヒト  
 村ノ山砲と置きて一壘と碎く山上の賊嶮と保  
 ち退つて二十九日曾我少將ヲ第四旅團と率  
 り鹿兒島灣と突艦し重富に至る蒲生吉田方  
 面と進撃せんとし先鋒隊進んで別府川と隔て  
 賊と戦ふ高島少將ヲ別働第一旅團と率カ大隅  
 垂水高洲と航を七月一日に至り高洲の東南鹿  
 屋一轉陣し日向都の城と進撃せんとし別働第

三旅團も亦二大隊と日向地方より出き長官川路  
 少將病ひを以て任を解きて帰京を大山少將と  
 是と替る田邊中佐參謀長より此時鹿兒島城と  
 據守するもの警視兵一大隊第四旅團一大隊あ  
 り警視隊ハ新上橋より甲突川の海口第四旅團  
 多城山より琉球館と守る三十日第三旅團鶴田  
 より全迂回し野木と取る此日豊後口の海軍鳳  
 翔艦より葛原の賊と砲撃を賊三河内と退ぞく

明治太平記  
世三編

行進隊二百  
百十人第  
四旅團の  
軍門は降  
伏を



明治太平記  
世三編

13

七月一日第二第三旅團兵と合一して大挙して粟  
 野と攻撃を午後横川と陥し兩旅團俱よ本營を  
 横川よ移す此日別働第二右翼皆越村哨兵所よ  
 賊兵七中隊許り来襲し守兵と走らせ進んで坪  
 屋村と奪ふ高島少佐と飯聞き走せし坪屋よ  
 至り苦戦して賊と逐ひ坪屋村と復す此夜第四  
 旅團の軍門は行進隊二百十人來りし降と乞ふ  
 隊長の相良五郎左衛門あり此隊最も賊中の強

勇ありそのとりし豊後口の軍エゴウの山の四  
 胸壁と抜き進んで第五壘よ至らんとし賊の迂  
 回兵よ遇ふる原線よ退く二日第二第三旅團の  
 兵俱よ加治木よ入らんとし途上シグへ村の賊  
 逃走し火藥糧食と獲る立文字坂よ至るべ別府  
 川を隔て賊と戦ふそのあり我兵背後と衝ん  
 とし此夜加治木の賊自焼して走ると以て對岸  
 の賊も引退く翌日と以て鹿兒島の軍と連

絡らと加か治ち木きよ通との事ことハ後のち卷まきよ委まかし述のべ  
 されば看み君きみ察さつし絲いとうし

明治太平記 廿二編 卷之一終

